

奄美大島やヤンバルの希少種はどのような脅威を受けているか

森林総合研究所 杉村 乾・小高信彦

奄美大島とやんばる

南西諸島は国際的に注目される希少種の宝庫ですが、奄美大島と沖縄島北部（やんばる）の森林にはとくに数多く生息しています。このため、現在、世界自然遺産の候補地として指定を受けるための準備が進められています。両地域は直線距離で200kmほど離れていますが、多くの共通性を持っています。まず、常緑の亜熱帯照葉樹林が大半を占めています。同時に皆伐方式による伐採面積が増大しましたが、1990年代に入ってからには伐採量がかなり減少しました。保護区外では例外的に皆伐を逃れたやんばるの米軍演習地を除くと、両地域ともごく一部が保護区に設定されているだけだからです。さらに、林道の拡幅とともにノイヌ・ノネコが奥地にまで侵入してきたほか、主にハブ対策として放逐され、急速に分布域を拡大したマングースの希少種に対する影響が懸念されています。とくにマングースの驚異は深刻に受け止められ、環境省や県が多くの予算を投じるとともに、献身的な人達による駆除の努力が続けられています。このように自然保護上、きわめて重要な地域ですが、希少種の生息状況をある程度長期的に追った記録は必ずしも多くはありません。

地道な調査

奄美大島ではアマミノクロウサギ、ルリカケス、オオトラツグミ、アマミヤマシギ、アマミトゲネズミなど、やんばるではノグチゲラ、ヤンバルクイナ、オキナワトゲネズミなど、希少なほ乳類や鳥類を中心とする調査において、総じて十分ではありませんが、地方や民間の関係機関が努力を積み重ねてきました。また、並行してマングースやノイヌなどの食性調査も行われています。これらの動物は体の大きさ、生態、行動などが異なるため、様々な調査法に頼り、手間がかかる割にデータはあまり多く集まりません。アマミノクロウサギは沢沿いや林道上にまとまって糞をする習性があるので数百、数千という数の糞粒をひたすら数え、トゲネズミはカゴ罠の中や周囲に椎の実を蒔いて生け捕りにします。活動時間はルリカケスやノグチゲラなどが昼行性、アマミヤマシギは夜行性なので調査時間も異なります。

長年の記録が語ること

アマミノクロウサギの新しい糞は表面が光り、ねばねばしています。この粘りけは2～3日で消え、一日あたりの脱糞数の記録もあるので、新糞が多く見つかる場所では何羽位のウサギが生息しているか、およそわかります。1970年代からの記録を並べてみると、マングースが放逐された地点を中心に分布域が後退しているのがわかります。また、どのようなパターンで生息数が減少してきたかを見てみると、マングースが多くなかった頃は林道沿いでノイヌ・ノネコの捕食圧が効いていたらしいこと、最近の変化は森の奥深くまで侵入しているマングースの影響らしいことがわかります。マングースは昆虫からヤンバルクイナ位の大きさの鳥獣まで手当たり次第、捕食すると言われています。やんばるではマングースの影響がおそらく強く働き、ヤンバルクイナの分布の南限が北上しています。奄美大島ではマングースが急激に増えた地域で、アマミヤマシギ、アカヒゲ、ルリカケスなどが減ってきたと報告されています。トゲネズミも奄美大島ではずいぶん生息数が減りましたが、やんばるでは約30年ぶりに捕獲に成功しました。一方、もっぱら樹上で生活するケナガネズミやオーストンオオアカゲラは、奄美大島で森林が回復してきた近年、目撃例が増えています。

ひたすら脅威が増大してきた感があるマングースですが、駆除努力が実り、ようやく減少傾向が見られるようになりました。次に調査するとき、どのような結果に現れてくるのでしょうか。